# 祝　辞

## 鹿児島市医報通巻「700号」に寄せて

鹿児島県医師会 会長　**池田　琢哉**

鹿児島市医報が昭和37年3月に第1号を発行して以来，通巻700号を数えるに至った。実に58年もの長きにわたり，時代とともに変化していく鹿児島市医師会の状況や，会員の声などを届けてきたことになる。現在，鹿児島市医師会に在籍しているほとんどの会員の先生方が，入会した頃より一つの重要な情報ツールとして，この医報を手にされてきたのではないだろうか。

鹿児島市医師会における理事会や委員会，区・支部だよりなどの医師会活動の報告は，会員ではあるものの，普段あまり医師会の活動に携わっておられない先生方に，医師会の活動や鹿児島市の医療が抱える現状と，課題などを知っていただく貴重な情報源となっている。もちろん，誌面には活動報告だけでなく，誌上ギャラリーや随筆などが掲載されており，寄稿される先生方の思わぬ趣味趣向が垣間見えることもあり，興味深く拝読している。

この医報を毎月確実に発行できるのも，編集に携わっておられる先生方のご尽力の賜物である。私も以前，鹿児島県医師会報の第10代目の編集委員長を務めたが，いかに会員の先生方に会報を手に取っていただき，読んでもらえるかという点に一番苦労した。それはいつの時代の，どの医師会の会報編集委員の先生方も，等しく抱える悩みだろう。

また最近では，インターネットの普及により，紙媒体ではなくタブレットやスマートフォンで書籍などを閲覧する先生方が増えている。鹿児島県医師会や鹿児島市医師会においても，ホームページ上に会報を掲載して閲覧できるようになっており，ふと気になった時に気軽に記事を読める，便利なツールとなっている。しかしながら個人的には，やはり実際に会報を手にとり，活字を読み進めるごとにページを捲り，時に気になったページに戻る・・・そういった時間を大切にしたいと思っている。鹿児島市医師会には，これまでの医報700冊が保管されていることと思うが，発行する側としてはやはり形として残していきたいと思うのではないだろうか。

医報を振り返れば，時代の移り変わりや医療界の変化などが読み解けることと思う。人の記憶は時とともに薄れゆくものであり，当時を知る先生も一人，二人と去っていく。それを補完するために，記録は必要不可欠なものである。ただし，単なる備忘録では，大半の会員の先生方にとっては退屈なものとなるだろう。

かつて鹿児島市医報の編集担当を務められ，鹿児島県医師会の会報編集委員にもご就任いただいた内宮禮一郎先生からは，会報を単なる報告だけのものでなく，娯楽性を取り入れることにより会員の興味を引くことや，スペースの使い方などをご教示いただき，それは今日の鹿児島県医師会報にも綿々と引き継がれている。

鹿児島市医報の初代編集委員長は，当時の医師会長であった島本 保先生であるが，医師会長自ら先頭に立って医報の編集・発行に尽力されたことは，医報の発行が医師会にとっていかに重要な事業と位置付けられていたのかが窺える。

初代の島本先生をはじめ，医報に対して愛情と情熱を持って取り組んでこられた多くの先生方のご尽力に深く敬意を表するとともに，これからも医師会の記録とともに会員のために役立つ情報を発信し，800号，900号，1000号・・・と続いていくことを切に願い，通巻700号発行を心よりお祝い申し上げる。